

【2015 年度第 1 回研究会発表要旨】

展示をめぐる時空間と博物館関係者の視座

— 北海道博物館におけるテーマ 2「アイヌ文化の世界」からの考察 —

アン・ロスリン

本報告では北海道博物館の新展示、テーマ 2「アイヌ文化の世界」を事例として、博物館の展示方針を、海外の博物館実践と国内の民族概念における「アイヌ」の位置づけから考察する。その際、アイヌ民族に関する常設展示に着目し、海外での博物館実践、日本の民族概念の立場から、当館が直面した問題を提示する。その中で、今年、リニューアルされた展示の位置づけを示し、過去から継続する問題への対応について考察する。

博物館実践：旧展示と時空間の対話

博物館学および人類学の理論と実践に影響を与えた言語論的転回と文化論的転回は、研究および展示対象となっている異文化の人々に関する表象を問題視してきた。そこでは、言語とは実に主観的な道具であることから、いわゆる客観的な観察の難しさと描写の乏しさを指摘し、展示にみられる客観性の限界と権力問題の存在を指摘した。

旧展示に対して、「現代」のアイヌ民族に関する展示が少ないことは、アイヌ民族を「消えてゆく民族」として表現していることにつながるという研究者の批判があった。アイヌ民族の「今」の存在を扱わないことは、アイヌ民族が「柔軟性のない不変的な文化の持ち主」であるということを描いていることにもつながる。更に旧館名に「開拓」という文字が入っていたため、北海道は「無主の地」という理解につながり、アイヌの土地に対する所有を抹消しているといった批判もあった。この論争は先に述べた客観性の限界と権力問題の表れである。

「アイヌ民族」について常設展示となった際、その展示は、当時では先端的であったとしても、時間の経過とともに「過去」になっていく。資料の整理と知識の彫琢のプロセスも同時に展示したいという学芸員もいるが、それはプライバシーの侵害になるとして困難を極める。学芸員の中にも、主流社会に属している自己による視点または研究分野の客観性を問わない学問もある。海外の博物館では、先住民に関する展示は、学芸員と先住民が一緒になり、共同で作業がすすめられるが、日本では専門的な知識を持った学芸員が対応することに終始し、海外のように進めることはしない。このように、博物館の立場と実践上の壁によって、先に示した批判に対応することは難しいのである。

来館者は、展示を受動的に受け止めるだけではなく、先入観を持ってとらえる。すべての資料の内容を理解し、その裏にあることを受け入れることは難しい。旧展示においてアイヌに関する近現代の展示は少なく、テーマ 2 以外ではわずかである。旧展示では実社会に沿った展示がされており、アイヌの人々の道民への同化が反映され、結果として展示の少なさに結びついている。しかし、展示されていないからといって、アイヌが「存在」していないわけではない。単一民族とは神話でしかないのだが、「国民」と「民族」を理解する際の柔軟性はいまだ人々には共有されていない。そのため、来館者の先入観という問題をいかに克服するかは、今後解決すべき課題として考えていかなければならない。

上記の企画に限らず、展示に関わってきたアイヌはなぜ展示品の制作に協力したのであろうか。前述したように道民と同様な生活を送っている中、自分の先祖が日常的に作って

いた物、歌った歌などに接する機会がないことが理由として挙げられる。更に、実社会において道民と同様の生活を送っている自分が、日常生活においてアイヌ文化を実践することは差別につながるという恐れがあるため、展示に協力することによって文化の実践が可能となり、アイヌとしての時間と空間を得ることができる。また、展示品の制作によって、自身の中にアイヌである部分が生きていることを示すことが可能となる。これは亡びゆく歴史の解釈に対する抗議であり、「私たちはまだいますよ」という自分の存在を強調する政治的な行為でもある。

展示をめぐる様々な解釈、または立場があり、それらによって異なった時空間が展示には示されている。では、新館と新展示は、これまで述べてきた展示をめぐる問題に、いかに対応し、そして斬新的な時空間を表現しているのであろうか。

新展示 テーマ2のブリコラージュ

レヴィ＝ストロースのブリコラージュとトゥルーズのアレンジメントを通してテーマ2の展示について考えたい。ブリコラージュとアレンジメントとは「混ぜる」という意味で、前者は入手可能な素材を合わせて新しい有形・無形の「もの」を作るという用語である。その際、使えるツールや素材には制限があり、好き勝手に混ぜることはできない。アレンジメントも同様の意味を持つが、構成されたものは柔軟で多様性を持つものである。混ぜ合わされたものが完全無関係だと、意味のない結果を生じさせ、そうなりつつあるプロセスとして強調される。できあがった「もの」がどのように変容し、どのような結果をもたらすかは測ることができない。博物館にとって、展示に終止符がうたれ、完成品と思われなくすることは大きな課題である。現在でも、活発にさまざまな分野を育むアイヌの人々もおり、彼らの歴史は時代の変遷と共に、変わりつつあるということの再認識も行われている。国会では、2008年にアイヌ民族を先住民とする決議がなされ。また、国内外においてアイヌ民族のさまざまな活動が存在する。この点を考えると、2015年の新展示においてはアイヌに関する展示の仕方について再検討が求められる。

テーマ2「アイヌ文化の世界」では、「現在を知る」「伝統を学ぶ」「言葉を聞く」「歩みをたどる」という4つの小テーマに分けられている。自動詞として表現されている各小テーマでは、固定していない文化という印象を伝えつつ、来館者との交流を意図している。「現在を知る」では「ある家族」を題材としたフィクションを設け、5世代を通して暮らしてきた北海道での時間と空間を位置付けた展示である。主人公は小学生の「ぼく」であり、「自分の家族の歴史を調べましょう」という宿題において、「九州生まれのお父さんの家族を調べたが、お母さんの方を調べなかったこと」が気になっているとされている。そこから「ぼく」は「お母さんの家族」について、5世代さかのぼり調べることで、アイヌ文化に出会い、北海道の先住民であるアイヌの歴史を説明するというストーリーとなっている。

この展示には、来館者と時空間と共有する仕組みが存在する。小学生の「ぼく」が主人公となった理由は、来館者の誰もが小学生であったことがあり、また、道内の小学校では学校遠足で博物館を訪問すること、つまり誰にとっても共有可能な視点から展示を捉えられるのである。第四世代のパネルでは、多くの来館者が博物館に来る際に利用する、JR新札幌駅が映されており、「お母さんは若い頃この駅から電車に乗って会社に行った」と書かれている。ここでのメッセージは来館者の周りには、いつもアイヌの人々がいて、同

じく小学校に通い、同じく電車を使って通勤するということであり、時空間の共有である。展示は、時空間を「今」「ここ」に限定しない。つまり、時代と場所のブリコラージュなのである。パネルの順番は 1850 年頃の話から彼の両親が生活する時代までという設定であり、家族の視点から述べられた多様な時空間が展示されている。フィクションでありながらも色々な事象や実在した人物との関連を持たせた展示となっている。パネルの字が多いため、来館者に注目して欲しいところを赤字にするなどの工夫がみられるが、これはパネルを作る業者からの提案とのことであった。赤字の部分は、衝撃的な内容で、来館者の注目を引く効果があり、日本における「国民」と「民族」という概念にある先入観を払拭することが可能となる。

「言葉を聞く」という展示では、4 つのスクリーンが設けられ、アイヌの舞踊と歌を来館者が自由に選択し、視聴できる。映像の内容も多様な時空間を提供しており、例えば「つるの踊り」ひとつをとっても、3 つの地方での踊りと異なる撮影年代のものが準備されている。ここで、2 つの映像に注目したい。「鍋沢さんのヤイサマ」は自宅で撮影されたものであり近年の日常的な背景と衣装映像で、ステージに限らず音楽と日常との関わりを示されている。「イヨマンテリムセを習う」では、文化伝承の学習プロセスを追い、異なった空間を示す中で、そのプロセスの表だけではなく裏を示した文化伝承の活動展示になっている。

本報告は北海道博物館の旧展示と新展示に対する多様な立場、視点から、時空間について議論することであったが、当然のことながらここで述べた視点が全てではない。更に付け加えるならば、各視点は平等に同じ重さの時空間を持っているとは限らない。例えば、アイヌの考えや活動などは限定された時空間に現れてくる一方で、一般社会の彼らに対する理解や誤解の方がより大きな範囲を有している。また、研究者が発言できる空間の方がより広く、より正当化されている。言語論的転回と文化論的転回という表象文化を問題視することによって、1994 年にあった民博のアイヌ展示に対する批判が成立し、国内の研究者が旧展示に対する批判がみられた。これらは海外の博物館においても直面した問題であった。対応する時代は異なるが、今年の新展示は上記の問題を解決しようとしている様子が確認される。一方で、海外の博物館研究、人類学の視点という空間からは、現在の博物館の役割は単に地域のために働くのではなく、いかに積極的に研究された側の人たちの文化振興と地位向上に働くかという点が課題になっている。これからの展示傾向は日本にある時空間の変遷と共に、もっとアイヌとの共同企画によって考えられるべきである。

(あん・ろすりん／北海道大学大学院文学研究科)

これまでから考える、これからの必要なこと

— 総合的研究分野アイヌ研究における「若手育成」と「情報共有」から考える「もう一步」—

若林和夫

本発表はアイヌ研究における研究資料・史料共有の事例を概観し、人文研究のみではなく理学、医学歯学系の研究を含めた博士論文の推移を見た。今後必要となる文化当事者、

研究者育成についての次の一手について考察を試みた。博士論文は日本国内の大学を対象とした CINI のデータを研究分析の一環として取得し分析に用いた（以下敬称略）。

概して、本州のいくつかの大学や博物館、北海道内の関連する機関や学会、研究会、個人、教育委員会、高等学校、大学等、様々な人々が現在使われている研究の基礎となる情報を公開してきた。特に最近音声資料を多量に音声とテキスト付きでオンライン公開しているところもあり、当日会場でスマートフォンを使って再生した。特にこの事業に関しては中川裕が構想を提示した情報共有が一部実現したものといえる（中川 2004）。

これらの情報を手に取ることや研究者や博物館などによって開かれた様々な勉強会やセミナーなどによってこれからアイヌに関する研究を志す人が知見や経験、人脈を得て、研究を行ってきた。特に興味深いのは昨年亡くなられた田村すゞ子先生のエピソードである。詳細は別途言及をしたいが服部四郎は、島村孝三郎という人物に、第二次大戦中にアイヌに関する言語調査をすすめられ、戦後、知里真志保らの協力や民間資本を得て『アイヌ語方言辞典』を完成させる（服部 1964）。この調査を基礎に研究の道に入ったのが田村すゞ子と村崎恭子である。特に田村の話をもとにすると、当時、偶然にもアイヌ語の調査の必要性を訴える服部四郎の授業を受け、自分の目を見て話されたように感じ、調査に加わる（田村 2010）。また村崎はその姿を見ていらして、調査に参加したという（村崎 1976）。

博士論文データについては、こちらの調査で把握していた論文 3 件を加えた上で考察した。1929 年（昭和 5 年）大恐慌の年から 2014 年（平成 26 年）までの約 130 件のデータを対象としている。1963 年以前はほぼすべてが北海道大学での理学、医学系での取得、1937～59 年までは文系理系を問わず北海道大学での博士取得で、それ以降は道内の私学なども含む。1954 と 62 年には、前者は知里真志保と後者は林善茂が文学と農学で取得。1960 年に国学院大学で久保寺逸彦が取得。医学系の研究では、1962 と 63 年を境に取得数が減少、1986 年で一度止まり、2003, 04, 11 年に取得されているのみであった。

文系の取得が一般的になるのは 1989 年、1990 年の歴史学や説話研究で取得されてから。1990 年代は全体の取得数は多くはないものの、1998 年の史学での取得を境として文系での取得が拡大している。現在の研究も増え、論文内で取り扱う内容も多様化、大学別の取得者では基礎からの育成を行える大学以外の取得が多かった。

以上の現在の傾向からしてアイヌに関する研究での博士取得自体は今後も続くと考え。様々な実務や研究の蓄積を持っていて研究職にある人も多く、これらの地道に研究を続けている人達が蓄積を続け、急がず焦らず、博士をとっていただろうと考えるに至った。少し踏み込んで言及するなら、扱う資料の年代を問わず言語系の博士課程在籍者が多いため、近世の言語史料の翻刻や近代から現代の説話資料の更なる分析から語彙範疇や説話構造、現在の言語獲得などのアイヌ語に関わる幅広いものとなると考える。また、現地（北海道とは限らない）のアイヌに関わる人達のなかで、博士でなくとも体験自体を論文化し修士などの学位取得へ向かい、我々を驚かせる論点で議論を行う人達もでてくるだろう。

この状況下で、データの整っていない文化系、言語系ではない研究を志す院生に必要な論文の収集、情報や手法、取材や調査、人脈やデータの所在確認を個人に手の限りを尽くしてやれ、現地へいけ、研究者を訪ねろというのは、正直、現状では荷の重いことと考える。研究者、文化当事者としてのアイヌ、サイレントマジョリティとして生きるアイヌ、一般の地域の人全てに暴力を振るっていないだろうか。優れた論文があっても、現在につ

いての十分な研究情報を手に取れないために、現状の誤認が目立ち引用がはばかれる論文もある。もっと研究情報を手に取れるよう努めていくべきだ。

では、どうしたらいいか。まず考古、文化、歴史、言語、現状に関する研究者、文化当事者の育成を統合することが求められる。現状を更に進めて多分野で、継続的に一定の教育の場で育成することで、若手と研究者と現地をつなぎ、人脈や情報交換の基礎を作ってしまうのだ。夢見事かも知れないが、さらには大学や研究機関以外の場で円滑に議論がされ、現地や研究者にフィードバックされるコミュニティの連携強化を行えば文句はない。

その上で研究、文化の現状認知獲得や現状のより良い建設的な議論、文化に偏らない振興を意識するなら、これらの雛形となるのは村崎が行ったセミナーだろう（村崎 1998）。現在に即して組み直すなら、夏や冬の学生が休みの時期に考古、歴史、近代、文化、現状の研究者と各行政機関が講義を行い、現地と研究者とこれから研究や文化に携わろうとする人達が寝食をともにするのがいい。講義は基礎的な手ほどきから論文を書くにあたっての情報の取り扱いについての講義も含め第一線の研究者による講義を受けられるようにする。かなり詰め込みだが、さらにはインターネット中継、アーカイブ化ありでやっていく事が必要だろう。研究者全員が集まるかは未知数だが、一週間ぐらい道内の何処かで、というのがいま考える「もう一步」だ。すでに優秀な人材が育ち（中川 2008）、彼らが学び、文化や研究に関する仕事をする先々で、基礎的な情報を持たないことによるミスや失敗から出る後悔を引ずり、「しまった」と気に病むことのない実のある場作りが急務である。

*アイヌ語音声資料の再生については平取町立二風谷アイヌ文化博物館の方々に唐突の問い合わせにも丁寧に対応頂いたうえ、取り組みについての言及の許諾をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。

参考文献論文・URL

田村すゞ子

2010 「服部四郎先生の弟子として歩み始めた日々」『国文学 解釈と鑑賞』75-1 至文堂 pp.27-34

中川裕

2004 「アイヌ語研究の課題—過去の遺産の活性化：アイヌ語音声資料アーカイブの必要性」『海外のアイヌ文化財：現状と歴史』小谷凱宣編 pp.145-148

2008 「アイヌ語教育の未来—「アイヌ文化振興法から 10 年 これから何をなすべきか」『普及啓発講演会報告集 平成 18 年度』（財）アイヌ文化振興・研究推進機構 pp.33-46

服部四郎

1964 『アイヌ語方言辞典』岩波書店

村崎恭子

1976 「まえがき」『カラフトアイヌ語 本篇』図書刊行会 pp.1-8

1998 「アイヌ語研修報告」《平成 10 年度言語研修報告》東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所『通信』第 94 号 pp.26-32

平取町立二風谷アイヌ文化博物館：<http://www.town.biratori.hokkaido.jp/biratori/nibutani/>

CINII 博士論文データベース：<http://ci.nii.ac.jp/d/>

（わかばやし・かずお／北海道民族学会会員）

明治時代以前の北海道における人とオオカミの関係性

— 札幌の事例を中心に —

梅木佳代

本発表は、北海道における「和人とエゾオオカミの関係性」を考察することを目的として行った。発表を通して、和人によるエゾオオカミの捕殺・利用が江戸時代後期から確認できること、さらにエゾオオカミは牧畜業と関わらない場面でも人にとって脅威となりうる存在だったことを指摘した。

かつて北海道に生息したエゾオオカミ (*Canis lupus hattai* ※以下「オオカミ」) は明治時代に絶滅した。その絶滅には人為的な要因が大きく影響したと考えられている。明治時代の北海道では欧米をモデルとした牧畜業が広く展開されたが、近代的な産業形態や多くの家畜が新たに持ち込まれたために、北海道のオオカミが「家畜被害をもたらす害獣」という位置づけに追い込まれたとも述べられる。また、過去の行政機関である開拓使はオオカミを「有害獣」として位置づけ、1頭ごとの捕殺に手当金を支給する「有害鳥獣獲殺」制度の対象としていた。先行研究においては、賞金を出してまでオオカミの駆除を奨励するという発想や制度は「お雇い外国人」を通して海外からもたらされたと考えられてきた。つまり、エゾオオカミの絶滅は人為的な要因によって引き起こされたが、その環境、発想、制度は本来「和人」が有するものではなかったと理解されてきたといえる。

しかしその一方で、和人とオオカミの関係性が明治時代の前後でどのように変化したのか、そして北海道におけるオオカミ害獣視の背景には近代的な牧畜業の形態と家畜被害のみが介在していたのかという点については、これまで十分に検討されてきたとはいえない。とくに当時の人々がオオカミに対して向けた意識や態度については、限られた情報に基づく推測の域を出ない議論も多く、新たな資料や情報を用いた検討をさらに重ねていく必要があると考える。

本発表における考察には、北海道内の各「市町村史」の調査結果を利用した。各自治体が発行する市町村史は、自治体の成り立ちから現在までを通史的に把握し記述する資料であり、北海道内にオオカミが生残していた明治時代中期以前の時期も記述の対象に含まれる。調査では旧 14 支庁 212 市町村から刊行された 355 冊の市町村史を対象とした。オオカミに関する記述はこのうち 115 の市町村で確認できた。しかし、話者や地域、典拠となる史料が明確であるなどの点から確実性が高いと判断でき、さらに人とオオカミの関係性が読み取れる具体的な情報の記載がみられるのは 115 中 32 の市町村史に限られる。このうち、江戸時代後期における人とオオカミの関係性については札幌市・七飯町・鹿部町・厚岸町の事例を利用し、明治時代以降の人とオオカミの関わりについては現在の札幌市に該当する地域の事例を中心として検討と考察を行った。札幌市を対象としたのは、明治 10 年代に市内で捕獲されたオオカミが剥製として現存することから、明治時代の時点で確実にオオカミが生息していた地域であることを科学的にも立証できる限られた地域のひとつといえるためである。

本発表における検討・考察の結果として提示した結論は次の 2 点である。まず、北海道における和人とオオカミの関係性は、明治維新の前後で大きく変化したとは言いきれないという点である。和人によるオオカミの利用、そして害獣としての駆除は江戸時代後期か

ら記録が存在した。明治時代における害獣視、そして駆除を推奨する制度を受け入れる素地は江戸時代後期には和人の中に存在していた可能性が考えられる。当時の人々の具体的なオオカミ観を検討するには至らなかったが、その一方で和人がオオカミの捕殺を忌む意識を有していた、あるいは神格化などの特別視をしていたことがうかがえる記述は北海道内の市町村史の記述の中には確認できない。明治時代の前後で和人のオオカミ観がどのように変化したのかを議論していくためには、より多くの事例の掘り起こしが必要であろう。

次に、仮に北海道に近代産業としての牧畜業が導入されなかったとしても、オオカミが「害獣」とみなされ、駆除の対象とされた可能性はあるという点である。大型の肉食獣であるオオカミとの不意の遭遇は人々に恐怖感をもたらすものであった。とくに開拓初期における道路の開削や土地の切り開きの際には、オオカミの存在そのものが作業を阻害する脅威・障害とみなされていた。牧畜業においてオオカミがもたらす家畜被害は経済的な損失と理解されてきたが、道路開削や切り開きにおいて生じる作業の遅延や作業従事者への精神的な負担も、やはり経済的な損害につながる事象といえる。

過去の北海道において和人とオオカミが遭遇し、互いを認識する機会は牧畜業に関わる場面に限定されていたわけではない。当時の人とオオカミの間に何が起きていたのか、そして実際にオオカミと向き合った人々の意識に、和人、アイヌ民族、来日した外国人それぞれのオオカミ観がどのように影響し、反映されていたのかという点については、今後も注意深く検討を進めていくべきであると考ええる。

(うめき・かよ／北海道大学大学院文学研究科)

アイヌ語「ウエンカムイ（悪神）」がさすもの

矢崎 春菜

アイヌ語で「妖怪（またはお化け、魔物など）」を意味する、あるいはそのように日本語訳がつけられる単語には、「ウエンカムイ」「ニツネカムイ（またはニクネカムイ）」「カミアシ（またはカメアシ、カムナシ、カムヤシなど）」「オヤシ」「オコッコ」などがある。

アイヌ語の辞典をみると、「ウエンカムイ」は「悪神」、「ニツネカムイ」は「凶悪な神」や「性悪な神」という意味であり、また「カミアシ」は北海道で使われるのに対し「オヤシ」は樺太で使われるというような方言差、「オコッコ」は子守歌などで子供を脅かす際に用いられるというように、それぞれの単語にはこのような違いがあることがわかる。では、アイヌ語でいわゆる「妖怪」と言う時、すなわちアイヌ文化におけるいわゆる妖怪的な存在の総称としては、これらのどの単語を用いることができるのだろうか。

本発表では、アイヌ語で「妖怪」というときにはどの単語がといるのかをテーマとし、そのなかでもまずは「ウエンカムイ」に注目して取り組んでいった。

今回の取り組みでは、アイヌの物語、特にアイヌ語の原文が読める資料をデータとして使用し、アイヌの物語においてどのような存在が「ウエンカムイ」と呼ばれているのかをみていくこととした。作業としてはまだ途中経過であり、またデータの収集結果としても、現段階では沙流川流域の伝承が主となっているが、現状としては次のような傾向がみえて

きた。

物語において「ウエンカムイ」と呼ばれているもの、またはそのように呼ばれている場合には、①妖怪的な存在、②動物、③不明、④ペケレカムイ（善神）との対として用いられている場合、⑤悪いものとして扱う場合があった。

①妖怪的な存在としては、ルルコシンプ（海の化け物）、ケナシウナラペ（湿地のおばさん、同様の意味でケナシコロウナラペとも呼ばれる）、キムンアイヌ（山男）、サクソモアイェプ（いわゆる大蛇）、ミントウチ（いわゆる河童）がみられた。このうちミントウチは「カミアシ」とも呼ばれていたが、今回取り扱った例文の半数以上が妖怪的な存在に対して「ウエンカムイ」と呼んでいるものであった。

②動物は、人間に対して悪事をはたらいた動物、あるいは危害を加えた動物であると考えられ、クマ、ネコが例としてみられた。ただし、動物を指す場合に関しては、アイヌのカムイ観をふまえさらなる考察が必要である。また、アラサルシ（妖熊）チチケウニツネヒ（オオカミの化け物）といったものも「ウエンカムイ」と呼ばれている例がみられたが、このような実際に存在する動物の性質が悪いもの、あるいは異様な姿をしているものについて、妖怪的な存在としてみるか、クマやオオカミとしてみるかといった、研究対象としてどのようにとられるかという問題があると思われるため、この動物を「ウエンカムイ」と呼ぶ場合については、さらなる考察が必要であると考えられる。

③不明なものとしては、物語の主人公（自叙者）がその正体を分かっていないもの、何であるのかが明確に語られていない例がみられた。

このように、何かしらの存在に対して「ウエンカムイ」というのに対して、具体的な何かではなく、④ペケレカムイとの対として用いられる、という場合もみられた。この場合は、「ウエンカムイ」と同様に「ニツネカムイ」も用いられていた。

また、⑤悪いものとして扱う、つまり悪いことをしていないものを悪く言う際に「ウエンカムイ」と言う場合もみられ、例として、水害があることを知らせにきたカワガラスに対して、「ウエンカムイがやってきた」と言うような物語がみられた。ただし、今回取り扱った例文をみても、何かしらの悪事を働いたものに対してののしる際に「ウエンカムイ」というものはみられなかった。

以上のように、「ウエンカムイ」という単語がどのようなものに対して用いられているのかをみていったところ、次のような傾向がみられることが確認できた。

物語において「ウエンカムイ」と呼ばれているものには、妖怪的な存在、アイヌに対して危害を加えた動物（カムイ）、何であるのか語られていないもの、正体が分からないものがあり、またその他にも、「ウエンカムイ」という言葉は「ペケレカムイ」との対の単語として使われる場合、その対象を悪いものとして扱う場合にもみられた。

このように、「ウエンカムイ」というものは特定の存在ではなく、その性質（何かしらの悪いものであるということ）をさしており、いろいろなものに対して「ウエンカムイ」と用いられると考えられる。

しかし、今回の取り組みで仕込んだデータは主に沙流川流域のデータであったため、これらはいくまで特定の地域に関する傾向であるといえる。今後は、より広い地域の資料を収集し、他の「妖怪」を意味する単語についても同様に取り組んでいくことが課題としてあげられる。

また、アイヌの妖怪的存在が「ウエンカムイ」と呼ばれる場合が多くみられるということならば、アイヌの妖怪的存在はすなわち「ウエンカムイ（悪い神）」であるということが出来るのかといった、アイヌの「妖怪」の定義に関しても、アイヌのカムイ観をふまえながら考えて行く必要があると考える。

（やざき・はるな／北海道大学大学院文学研究科）